



市民の力で森を守る(追分・矢指市民の森愛護会)

楽しむ・学ぶ・守る / 横浜の市民力

市民と行政がともに取り組む「市民協働」の概念は、現在では広く受け入れられています。横浜ではそれ以前から数々の先駆的な取組がなされてきました。

中でも、地域住民で結成される「公園愛護会」は昭和36(1961)年の制度開始以来、市内の約9割の公園で結成され、日常的な管理を担っています。この結成率は全国的に見ても高く、市民の暮らしに公園や緑が息づいている横浜の特色のひとつです。

市民の森(P18)などの樹林地では、開園当初から樹林地の所有者や周辺住民による愛護会が管理をしてきました。平成になると、樹林地の所有者や周辺住民以外の市民の間でも樹林地の保全に対する関心が高まり、活動を行うようになりました。平成8(1996)年に、市内で森づくり活動をする市民団体が母体となり「よこはまの森フォーラム実行委員会」が発足。平成14(2002)年には「森づくりボランティア団体育成・支援要綱」が策定され、各

種支援の取組が始まるなど、現在に至る市民参加の仕組みが整いました。

農の分野では、都市農業の確立を目指す中で早い時期から様々な形で市民が農家と関わってきました。昭和45(1970)年頃からは、野菜の直売会やナシのもぎ取りで農家と市民との交流が行われてきました。それ以降も市民菜園の開設(P16)など、市民が農にふれあうことができる取組が進められました。現在では地産地消を市民に広げる「はまふうどコンシェルジュ」の活動や、農業生産に市民の力を生かす「援農」も展開されています。

新たに緑を作り出す緑化の分野では、市が公共施設の緑化を進めるだけでなく、市民が主体となって住宅など身近な空間の緑化を推進してきました。また、市はその取組を支援してきました。

このように、様々な場面で高い評価を得ている横浜の「市民力」は、緑分野でも大きな力を発揮しています。

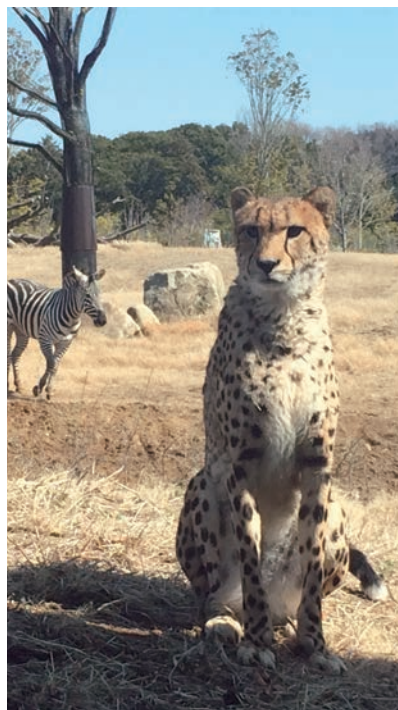
Column 10

野毛山からズーラシアへ 横浜の動物園

横浜は3つの動物園があります。が、そのすべてが都市公園内に設けられています。

横浜の動物園の歴史は昭和24(1949)年、野毛山公園で日本貿易博覧会(P10)を開催し、その一角に動物を展示したことに始まります。昭和26(1951)年4月には遊園地を併設した野毛山遊園地として動物の展示を続け、遊園地廃止後は順次動物舎を増やし昭和47(1972)年に野毛山動物園となりました。長い歴史を持つ野毛山動物園は親から子、子から孫へと世を超えて親しまれています。

金沢動物園は金沢自然公園の動物園区として計画されました。「生態系」という概念をいち早く取り入れたことが特徴でした。このコンセプトと野毛山との区別化から専門的動物園をめざし、希少草食動物を無柵放養式で展示すること



よこはま公園ズーラシア(旭区)の「サバンナゾーン」

開園後は理解が進み、今では全国各地の動物園の改修のモデルとなっています。平成27(2015)年には、日本で初めて肉食動物と草食動物を一緒に展示する「サバンナゾーン」が開園しました。

公園愛護会制度

公園愛護会は身近な公園の管理、活用について中心的な役割を担う地域のボランティア団体です。活動内容は、清掃や草刈り、花壇や低木の手入れといった美化活動、利用マナーの啓発の他、子供と一緒に活動したり、地域イベントを積極的に行ったりする愛護会もあり、活動を通して参加者同士の交流や健康づくり、子供の見守りなどにも役立っています。

市の公園担当者が「公園は地域の鏡」と言うように、いつも清潔に保たれ子供からお年寄りまで様々な世代で賑わう公園には、活発な公園愛護会があり、それを支える地域の方がいます。

平成17(2005)年には、さらなる活動の活性化を目指して制度を見直し、公園愛護会の運営を支える市の職員「維持管理支援班」と「公園愛護会コーディネーター」が置かれました。維持管理支援班は、公園に出向いて愛護会に中低木の刈込法を教えるなどの技術的な支援を行います。公園愛護会コーディネーターは市内全18区に置かれ、公園愛護会から寄せられる相談等を基に、支援メニューの提案や活動のアドバイス、地域への働きかけなどの活動支援をしています。



花壇の手入れ



堆肥づくり



中低木の刈込



公園でのイベント



維持管理支援班による技術支援



公園愛護会PRキャラクター「あいごぼん」を活用した普及啓発

森づくりと市民参加

市民の森やふれあいの樹林などでは、多くの市民が愛護会や森づくりボランティアとして清掃などの日常の維持管理や「森づくり活動」を行っています。

森づくり活動は、一般にイメージされる間伐や下草刈りといった保全作業だけでなく、動植物の調査や作業で出た間伐材の活用など多岐にわたり、ボランティア各々の得意分野や関心のある分野で活動しています。また、イベントや観察会、マナー啓発などを通して、ひろく市民に森の魅力を伝え、担い手のすそ野を広げる役割も果たしています。

こうした活動は、行政による管理では行き届かないきめ細かな管理を可能にすることから、横浜の森づくりには欠かせないパートナーとなっています。



森の保全活動の様子(新治市民の森愛護会)

「援農」の取組

平成5(1993)年、労働力不足の農家に市民の力を「援農」として活用しようと、市は人材育成講座を開始しました。農業に関心のある市民が農作物の栽培基礎を学び、講座修了後に援農するという仕組みです。平成14(2002)年には、講座修了生で構成する援農団体「横浜農と緑の会(通称:はま農業)」が設立され、それまで農とのふれあいを楽しむ立場にいた市民が、農業生産に直接関わって応援する立場になりました。

農作業を通して、生命を育む活動に参加する市民は、横浜の農業を支えるとともに、自らも土と心を耕す充実感を得ています。



援農の様子

緑化と市民参加

横浜市では、早くから緑化を希望する市民の取組を支える事業を行ってきました。

昭和41(1966)年、子供の誕生を記念して木を植える「おぎゃあ植樹」が始まります。昭和52(1977)年には、対象を人生の節目に広げ「人生記念樹」となります。

昭和59(1984)年、市民や企業からの寄付を積み立てる「よこはま緑の街づくり基金」発足を機に、横浜市公園協会が改称し、「横浜市緑の協会」が発足。基金を活用し緑化に取り組む団体の支援を開始しました。

開港150年を控えた平成18(2006)年から開始された「150万本植樹行動」では4年間で市民行政合わせて180万本の木々を植えました。



150万本植樹運動の様子